



瀬戸内の移り変わり

景観写真家・(有)ウイット
脇 山 功

■ 戦後の海

梅雨が明けると待ちかまえていたように、手作りのヤスを持って島の沖の磯に素潜りすると大きなイシダイがいた、息のつづくかぎりに狙いを定めてヤスでついた。潮がひき浅い海辺を歩くと、岩陰にひそんでいるタコを獲り晩御飯のおかずになった。

島の入り江には、ときどきスナメリの大群がやって来た、刺し網にはカブトガニがよく掛っていた。私が、子供のころ島の出来事です。

私は、昭和28年に瀬戸内海のほぼ中央部、ひうち灘の小さな島で生まれ育った。その頃の島では、海の幸がいっぱいだった。

小高い山の頂上まで耕された段々畑（写真6, 7）、浜では漁具の手入れをしている漁師がいた。沖を見れば、九州と関西を結ぶ航路があり、機帆船がノロノロ航行していた。この頃の瀬戸内海の風景が私の原風景になっていった。

島は、主だった産業がなく、半農半漁で生計を立てている家がほとんどだった。やがて島の人たちは、一軒一軒と島を離れていった、私が中学生の頃は20軒ほどの家族がまだあった。その頃から海の汚染が深刻になって、豊かだった海からは、魚影がすっかりうすくなってしまった。我が家も隣の大きな島に引越し、父は造船所に勤め、母は海苔の加工場に勤めた。私は島を離れ大都会へ向かった。

■ 平成の海

大都会の生活は、私には合わず古里に近い広島に勤めた。昭和の終わり頃に父が他界した、と同時に生まれ育った古里の島が懐かしく、久しぶりに島に帰るとあまりに変貌していた。

段々畑は元の山に戻り、わずかに痕跡をとどめ、小学校は荒れ放題になっていた。僅かに2軒の家が残っていて訪ねると私の事もよく覚えていてくれた。海に目をやると幼い頃遊んだ岩は、当時と変わることなく波にあらわれていた。

それから、私の原風景を探して休日には、瀬戸内海各地に出歩くようになりシャッターを切ったが昔の面影を残す場所はほとんど無くなっていた。

平成に入り、写真撮影を仕事にしてからは、以前にも増して各地に出かけた。行くたびに自然海岸が、埋め立てや、道路の拡張（写真3, 4, 5, 8, 9）などにより消滅していった。また、防潮護岸などにより、海に近づきにくい場所が増えてしまった（写真1, 2, 5, 9）。人口海浜には、生き物はほとんど見かけない。平成の瀬戸内海に懐かしい風景を求めるのは困難であった。私の撮影は方向が変わり、海辺の移り変わる様子を記録してゆく方向に変えた。

■ これからの海

幕末から明治期に訪れた欧米人は、瀬戸内海の風景を賞賛している。これは、単に島が多いことなど地形的な面白さや美しさに対してではなく、山の頂きまで耕された段々畑（写真6, 7）や、集落の佇まいなど、人々の営みによってつくられた景観を含めて、賞賛したのではないだろうか。

昭和、平成に大きく変貌した瀬戸内海は、世界へ向けて自慢できる風景は少なくなったと思わざるをえない。

明日の瀬戸内を思うに、人工海岸や、埋め立て地、必要以上の防災護岸など、産業と社会的背景などによって壊れた風景や自然。これらの再生にヒントがあるように思える。

眺める人が心なごむ風景や、海に近づきやすい渚、自然の生態系にやさしい環境を整備し、再び世界の人々が賞賛する瀬戸内海を夢見る。

1



2



3



4



5



写真1	1980年 8 月	弓削島
写真2	2008年 3 月	弓削島
写真3	2000年 5 月	坂水尻
写真4	2002年11月	坂水尻
写真5	2009年 1 月 1 日	坂水尻
写真6	1995年 2 月	上関町
写真7	2009年 2 月	上関町
写真8	1995年 2 月	倉橋島
写真9	2008年 1 月	倉橋島

6



7



8



9

